



悲しいあの時から一年が過ぎる。被災地では、“時”はいまだに止まったままだというお気持ちは、阪神・淡路大震災の時に我々が味わった“あの時”と同じ思いだろう。

しかし、復興・復旧に立ち向かえる状況・環境はちょっと違った姿のようにも見えてくる。余りにも災害の規模が大きく広いこともあるけれど、その中で手が付けられずに残るガレキの山が、復興の妨げになっているのが大きな要因と聞く。

被災地の方たちにとっては、これらは決してガレキの山ではなく、一人ひとりの思い出がいっぱい詰まった心残りの山に違いないのだが。

地元での処理には、10年・20年を要する量を抱えては復旧も進まない。

今は全国規模で引き受けて処理を進めるしかないと言われる一方、付着した放射能を心配しての拒否反応があることも事実。しかし、ここは科学から裏打ちされる真の危険度・安心度をみんなで共有し、安心分を分担処理していくしかこの山は無くないのでは…。

神戸はみなと街、安心とされた処分物をごっそり大型コンテナ船で運び込み、神戸空港の空き埋立地に活用するというのはどうだろう。

我々世代には、現地ボランティアとなると気は向いても足が動かない。せめて心に向けて、寄り添う気持ちを形としたエールで受け入れられればと思っている。

(ひしのみ 125号 写真と文 菅田 忠志)